

『ガーリブ詩集』と編年体の 観点から見た『ガーリブ詩集』

片岡弘次

Textbooks on Diwān-e-Ghālib and Diwān-e-Ghālib from the Standpoint of Chronology

Hiroji Kataoka

要 旨

『ガーリブ詩集』は今までたくさん出された。そして現在、その詩集は内容は変わらず、さまざまな出版社から出されている。とするとこの内容を同じにさせている原本は何かの考察のため、今まで出版された『ガーリブ詩集』を見る。

1. 町で売られる『ガーリブ詩集』の版はどれを基準に作られたものか

ガーリブが生涯5度にわたって『ガーリブ詩集』を出版したことはよく知られている。まず最初が1841年、2度目が1847年、3度目が1861年、4度目が1862年、最後が1863年である。これらの出版年を見るとそれぞれの年度に出た詩集の内容が、異なるように見えるが必ずしもそうではない。しかし新しい年度ほど新しいのが加えられてはいるが、それ程多くはない。というのはその殆どが30代までに書かれているからである。

インド・パーキスターンのガーリブ研究者はガーリブの詩の数を数える時、ガザル、カスィーダ、カタール、ルバーイーなどの型式にとらわれず、それぞれの詩の中の二行の対句の数で計算している。それによると、1841年の版の対句数は1093、2番目のは1158、3番目のは1796、4番目は1802、そして最後のは1795と数えている。

以上がガーリブの存命中に出版された『ガーリブ詩集』である。ガーリブの没後出版され、ガーリブ詩集についての研究に重要な1928年出版の『ハミード版』や1958年出版の『アールシー版』などもある。さらに手書きによる1821年の『ボーパール版』、1826年の『シーラーニー版』、1829年の『グル・ラーナー』、1833年の『ランプル版』、1852年の『ラーホール版』、1855年の『ランプル・ジャディード版』、1856年の『ガーリブ選』などがある。これら手書きによる版も、それぞれの総対句数は異なっている。

しかし現在インドやパーキスターンで手に入る『ガーリブ詩集』を見ると、ガザル235編、カ

スィーダ4編、マナヴィー2編、カタール16編、ルバーイー16編と同じである。ここ何年か、それらの編数を決めたものは何かの疑問にとらわれて、インドやパキスタンのウルドゥー文学研究者にそのことを聞いてきた。しかしガーリブには上のような手書きものがあったり、5度の印刷出版の話はしてくれるものの、どれが基本になっているかという明確な言葉は誰からも得られなかった。

しかしたまたま、デリーのガーリブ・インスティテュートから1986年に出された『ガーリブ詩集』の序文により、現在、一般に行きわたっている『ガーリブ詩集』のものは、1862年に出版された4番目の『ガーリブ詩集』であることがわかった。その序文はつぎのようである。

「ガーリブの『ウルドゥー語詩集』は生前5回出された。最初は1841年デリーのマトブーア・ダールル・イスラームより出され、最後は1863年アグラのマトブーア・ムフィード・カライクからであった。これら出版の詳細はアールシー版『ガーリブ詩集』の序文にある。これら5度にわたる出版の中、4番目の出版が特に重要で、それは1862年カーンプルのマトブーア・ニザーミーから出されたものである。この詩集には二つの特徴がある。その一つは他の4つの詩集に比べて作品数が多い。第二は、ガーリブ・インスティテュートのこの『ガーリブ詩集』はその版によるもので、その校正はガーリブ自身が行なっている。この二つの理由によりカーンプルから出た4番目の詩集は他のものよりすぐれている。この『ガーリブ詩集』はその4番目のものに基づくものである。この4番目の詩集になお訂正すべき所があり、その校正はアールシー版『ガーリブ詩集』によってした。現在町で売られているものは4番目のものに基づくと言える」¹⁾。

そこでこのガーリブ・インスティテュートから出されたものと、パキスタンのラーホールのフェロンズサンズから出たものとを較べてみると²⁾、両方ともガザルの編数は235、カスィーダの編数は4、マナヴィーの編数は2、カタールの編数は16、ルバーイーの編数は16ですべて同じであった。ただ違うところは4番目の『ガーリブ詩集』のコピーであるガーリブ・インスティテュートの方には最後に余分に234の対句がついていないことだけだった。

そこで今日、町に出回っている『ガーリブ詩集』はガーリブ・インスティテュートから1986年に出された『ガーリブ詩集』の序文にある通り、1862年に出版された4番目のものを中心にして編まれたものといえる。

2. 今まで出された『ガーリブ詩集』

現在、インドやパキスタンの本屋に行き、どこの本屋でも手に入るのが『ガーリブ詩集』である。しかしガーリブの研究者が注目する詩集は以下の手書きによる詩集と出版社から出されたものの二種類に分けられる

(1) 手書きによるもの

1. ボーパール版『ガーリブ詩集』³⁾ (1821年)

1821年に作られたもので、手書きの『ガーリブ詩集』の中で一番古く重要なものである。

本の構成は現在の『ガーリブ詩集』とは異なり、はじめにカスィーダがありその後にガザルが来ている。

それぞれのページの余白部には修正や付け加えがある。訂正や付け加えはその都度ごとにされたのが分かる。詩集の最後の余白部にこの詩集が出来た後に書かれた詩も載っている。しかしそれはガーリブの手によったものかどうかは不明である。

これはガーリブ自身のためにつくられたもので、ガーリブも目を通し、ガーリブ自身が訂正した跡がある。1826年のシェーラーニー版『ガーリブ詩集』ができるまでガーリブの手許にあり、その後、何人かの手を経て、1832年ポーパールのフォージダール・ムハンマド・カーン・バハードゥルのもとに着き、その人の蔵書印がある。

現在、ポーパール図書館に所蔵されている。

2. シェーラーニー版『ガーリブ詩集』⁴⁾ (1826年)

この手書きの版は2番目のものである。これにより前のポーパール版の確認ができる。以前、マフムード・カーン・シェーラーニーの所にこの版があったが、現在はパーキスターンのラーホールにあるパンジャブ大学の図書館に所蔵されている。

頁数は109頁で、ガザルから始まり、カスィーダへと続く。

筆耕者による書きそこないや字の違いもある。頁の余白にガーリブ自身による訂正の跡も見える。

この詩集に見える表現は複雑で、比喩なども難解である。それ故、ガーリブの評判はよくなかったがガーリブは気にしなかった。しかし徐々に、後で複雑さを改める契機になった。

またこの版の余白には、ガーリブが年金訴訟でカルカッタに行く途中、バーンダーなどで作った詩が送られてきて、その詩も書かれている。

3. 『ゲル・ラーナー』⁵⁾ (1829年)

これはガーリブのウルドゥー語とペルシア語の作品の最の選で、モウルヴィー・スラージ・ウッディーン・アハマドの助言でなった。

その一冊がガーリブの研究者マーリック・ラームの所にある。

頁数は49頁である。前半がウルドゥー語の作品で後半がペルシア語の作品となっている。

ウルドゥー語の総対句数は453で、それぞれ対句の二行目の最語の語句の繰り返し（ラディーフ）の終わりの字につぎの字を持つものの対句数は以下の通りである。

アリフ	113	ゼー	5	ガーフ	2
ベー	7	スィーン	5	ラーム	3
テー	5	シーン	2	ミーム	3
ダール	4	アイン	3	ヌーン	67
レー	6	フェー	4	ヘー	4
		カーフ	6	イエー	196

この版の中には1826年以降の作品も入っている。

4. ラームプル版『ガーリブ詩集』⁶⁾ (1833年)

この版はラームプルにある一番古いものである。

ペルシア語での前書きがあり、そのあとガザル、カスィーダ、カタール、ルバーイーの順で出てくる。総対句数は1067で、そのうちガザルの対句数は978である。ラディーフの終わりの文字別でまとめた対句数は以下の通りである。

アリフ	226	スィーン	8	ヌーン	127
ベー	11	シーン	2	ワーオ	29
テー	19	アイン	7	ヘー	3
ジーム	4	フェー	2	イエー	432
チェー	6	カーフ	10	[カスィーダ]	60
ダール	9	ガーフ	2	[カタール]	13
レー	39	ラーム	9	[ルバーイー]	16
ゼー	20	ミーム	8		

ガーリブはこの版にも手を加えている。だが『グル・ラーナー』は手許になかったようである。

5. ラーホール版『ガーリブ詩集』⁷⁾ (1852年)

この中では詩の配列順はガザル、カスィーダ、カタール、ルバーイーの順である。総対句数は1547で、うちガザルの対句数は1311、カスィーダの対句数は162、カタールの対句数は50、ルバーイーの対句数は24である。ラディーフの最後の文字別による対句数は以下の通りである。

アリフ	284	ジェー	284	ラーム	9
ベー	12	スィーン	12	ミーム	8
テー	19	シーン	19	ヌーン	209
ジーム	4	アイン	4	ワーオ	44
チェー	6	フェー	6	ヘー	2
ダール	9	カーフ	9	イエー	580
レー	69	ガーフ	69		

この版についてはガーリブは初めから最後まで目を通してしている。筆耕者の間違いやなおすべき所はなおしている。

6. ラームプル・ジャディード版『ガーリブ詩集』⁸⁾ (1855年)

この版の詩の配列順はペルシア語の詩集のようになっている。即ちはじめにカタール、つぎにマスナヴィー、カスィーダ、ガザル、ルバーイーの順である。対句の総数は1790で、カタールが110、マスナヴィーが33、カスィーダが162、ガザルが1453、ルバーイーが32である。ラディーフの最後の文字別による対句数の詳細は以下の通りである。

アリフ	305	ゼー	20	ラーム	9
-----	-----	----	----	-----	---

ベー	12	スイーン	7	ミーム	8
テー	19	シーン	2	ヌーン	225
ジーム	4	アイン	8	ワーオ	80
チェー	6	フェー	2	ヘー	3
ダール	9	カーフ	15	イエー	648
レー	69	ガーフ	2		

この版についてもガーリブは目を通し、なおす必要のある所はなおしている。

(2) 印刷され出版されたもの

1. 第1版『ガーリブ詩集』⁹⁾ (1841年)

『ガーリブ詩集』の印刷された初版はデリーのマトブーア・サイヤド・アクバールにより1841年に出版された。この選はすでに1833年に終わっていた。

この中には1095の対句があり、ラディーフの終わりがつぎのような字を持つ対句の対句数は以下の通りである。

アリフ	229	ゼー	20	ミーム	8
テー	19	スイーン	8	ヌーン	128
ジーム	4	シーン	2	ワーオ	38
チェー	2	アイン	8	ハー	3
ダール	8	フェー	2	イエー	441
レー	39	カーフ	2	[カスイーダ]	25
				[カター]	
				[ルバイヤート]	

この初版は現在、ランプル・レザー・ライブラリーに所蔵されている。

2. 第2版『ガーリブ詩集』¹⁰⁾ (1847年)

初版に続き6年後の1847年、第2版がデリーのマトバーエ・ダール・アッサラームより出版され、まえがきなどは初版と同じで、総対句数は1114である。初版の出版から6年を経ていたが、わずかに16の対句がつけ加えられただけである。この期間、ガーリブの関心は、ペルシア語で詩作することに向けられていた。

3. 第3版『ガーリブ詩集』¹¹⁾ (1861年)

まえがきなどは初版、第2版と同じで、デリーのマトブーア・アフマディーから出版された。総対句数は1794と増している。1840年代の末よりムガル朝の宮殿に出廷するようになったことによる。

4. 第4版『ガーリブ詩集』¹²⁾

カンプルのマトブーア・ニザーミーから出版され、その総対句数は1802である。この対句数は初版より最後の第5版までの中で最大の対句数となる。

5. 第5版『ガーリブ詩集』¹³⁾ (1863年)

すでにデリーやカーンプルの地より出版されていたので、今までに出版されていない所ということでアングラから第5版が出された。出版社はマトブーア・ムヒード・カラーイクで、総対句数は1795であった。

以上の5冊がガーリブの生前に出版されたものである。

(3) ガーリブ没後に出版されたもの

1. ハミーディヤ版『ガーリブ詩集』¹⁴⁾ (1928年)

ポーパールから出されたもので総頁数は139頁である。1841年初版の『ガーリブ詩集』より1863年の第5版までの『ガーリブ詩集』はすべて100頁より110頁の間のものであったので一番頁数が多い。また集録されている対句数も1883で一番多い。

この版の原本となったものは1821年作の手書きのもので、ポーパールのハミーディヤ・ライブラリーで発見された。それを1921年印刷出版した。ガーリブの没後さまざまな『ガーリブ詩集』が出版されたが、これはガーリブ研究に一番重要な『ガーリブ詩集』と考えられている。

これはナワブ・ガウス・ムハマド・カーンの息子、ミヤーン・フォージダール・ムハマド・カーンのために書かれたものである。それ故、詩集の中にその所有を示す印が押されている。その中にガーリブ自身の手による訂正も見られる。1821年の前に、ガーリブは自分の詩を詩集のかたちでまとめていたと推測できる。

この詩集を参考にしてガーリブの詩を見ると、その後、ガーリブがどの詩を省いたか、ガーリブが自分の詩をどのように訂正しようとしたか、同じ詩が他の版ではどのようにになっているかなどが分かる。

現在の『ガーリブ詩集』には235編のガザルが集録されているのが一般であるが、この詩集には285編のガザルが集録されている。総対句数1883のラディーフの最後の文字による内わけは以下の通りである。但しカッコ内の数字はガザルの編数をさす。

アリフ	405(60)	レー	52(8)	ラーム	34(5)
ベー	13(2)	レー	52(8)	ラーム	34(5)
テー	11(2)	ゼー	59(6)	ミーム	36(5)
セー	13(2)	スィーン	16(3)	ヌーン	189(28)
ジーム	14(2)	シーン	19(2)	ワーオ	47(6)
チェー	23(3)	ガイン	12(2)	ヘー	54(8)
ヘー	5(1)	カーフ	30(4)	イエー	766(114)
ダール	40(5)				

2. アールシー版『ガーリブ詩集』(1958年)

1958年、アリーガルのアンジュマン・タラッキー・ウルドゥーより出版される。編者はラーンプルのラザー・ライブラリーの館員、イムティヤーズ・アリー・アールシーであったが、このアー

ルシー版『ガーリブ詩集』にはガーリブの詩だけでなく、ガーリブが自分の詩についてした解説まであり、ガーリブの詩の研究にはきわめて有益なものといえる。

3. 年代別『ガーリブ詩集』

ガーリブは『ガーリブ詩集』をその生涯の中で5度にわたって出した。今日でも繰り返し出版されている。しかしそれらで、詩作の傾向の変化やガーリブの生涯と詩作との関係を知ることはできない。それは詩集の編み方が年代順でなく、ラディーフの最後の文字を使って詩の配列がきめられているからである。

今まで、アブドゥル・ラティーフ、シャイク・ムハンマド・イクラームやマーリク・ラームなどのウルドゥー文学者が、ガーリブの全作品を年代順に編む努力はしたが、みな不完全であった。だが1988年、カーリーダース・ダプタ・リザーがその編著、『年代別ガーリブ詩集』¹⁵⁾を編むことに成功し、ガーリブのウルドゥー語詩の全詩を初めて年代別に編んだ。そしてガザル716編、カタール31編、ルバーイー24編、カスィーダ10編、マスナヴィー3編、その他の形式の詩を数編、ガーリブの生涯における作品とした。

K.D.G.リザーはガーリブの生涯をつぎの資料をもとに11期に分けている。すなわちガーリブの全作品を11期にわけている¹⁶⁾。

第1期 (1707～1812) “Tazkirah-e-Umdah Muntakhabh” “Tazkirah-e-‘Ayār Ashsh’ara”

第2期 (1813～1816) “Nuskhah-e-Bhōpāl” (Bakhatṭ-e-Ghālib)

第3期 (1817～1821) “Nuskhah-e-Bhōpāl” (Mashmūlāh-e-Nuskhah-e-Hamidiyah) 1821.

第4期 (1822～1826) “Nuskhah-e-Shīrānī” 1826.

第5期 (1827～1828) “Nuskhah-e-Shīrānī” “Gul-e-Ra’nā” 1828.

第6期 (1828～1833) “Nuskhah-e-Rāmpur” (‘Awwal) 1833.

第7期 (1834～1847) “Intikhāb-e-Ghālib” 1836. “Nuskhah-e-Badayūnī” 1838. “Dīwān-e-Ghālib” 1841. “Nuskhah-e-Dēsnaḥ” 1845. “Nuskhah-e-Kalīm-Uddīn” (Karachi) 1845. “Dīwān-e-Ghālib” 1847.

第8期 (1845～1852) “Nuskhah-e-Lāhōr” 1852.

第9期 (1853～1857) “Nuskhah-e-Rāmpur” (Sānī) 1855. “Qādirnāmāh” (‘Awwal) 1856.

第10期 (1857～1862) “Dīwān-e-Ghālib” 1861.

第11期 (1863～1867) “Dīwān-e-Ghālib” 1863.

2) 編年体の観点から見た『ガーリブ詩集』

ガザル3千句という言い方があるが、ウルドゥー語のガザルを数える場合でも、編数よりも対句数でいくつという言い方がされます。K.D.G.リザーによれば、ガーリブはガザル以外の対句も含めて4209の対句を読んだ。今、K.D.G.リザーによる『年代別ガーリブ詩集』をもとに、詩作年数と詩作数の関係、さらに『ガーリブ詩集』との関係を表にするとつぎのようになる。

『年代別ガーリブ詩集』			ごく普通の『ガーリブ特集』				
期	間	全対句数	ガザル編数	ガザル対向数	ガザル編数	ガザル対向数	完全なガザル数
第1期(1807～1812)	10～15歳	59	16	37	1	4	0
第2期(1813～1816)	16～19歳	1734	239	1682	75	303	2
第3期(1817～1821)	20～24歳	695	62	484	44	277	18
第4期(1822～1826)	25～29歳	295	37	295	36	269	22
第5期(1827～1828)	30～31歳	91	8	91	8	76	5
第6期(1829～1833)	32～36歳	89	13	55	13	51	12
第7期(1834～1847)	37～50歳	89	11	81	10	77	8
第8期(1848～1852)	51～55歳	444	29	251	29	251	28
第9期(1853～1857)	56～60歳	440	17	151	17	150	1
第10期(1858～1862)	61～65歳	95	9	24	2	6	0
第11期(1863～1867)	66～70歳	175	6	45	0	0	0
合	計	4209	447	3199	235	1404	111

表よりつぎのことが分かる。(1)20歳前後に詩作数が多く、(2)30歳から50歳の間が少なくなり、(3)50代に到り再び詩作数が多くなっている。また『ガーリブ詩集』への実作数からの収録数を見ると、(4)20代前では実作数が多いにもかかわらず収録数は少なく、収録されたとしてもその対句数は少なくなっている。それに対し、30代以降、収録された作品は、対句の落ち方も少なく完全なガザルでの収録となっている。

(1)に対しては次の理由があげられる。「当時ガーリブの関心はウルドゥー語での詩作にあった。バイダルやショーカットの調子で書き、20歳位までに対句を2千集めて詩集を出す積りであった」¹⁷⁾。ガーリブは28歳の時、年金訴訟の件でカルカッタに行くが、それが(2)と関係がある。「デリーではウルドゥー語での詩作が盛んでペルシア語で書く人はごく少数であった。それに対し、ビハールやベンガルでは当時ペルシア語での詩作が普通で、有名になるためにはペルシア語で上手に書けることが第一条件で、ガーリブもペルシア語へ関心を向けざるを得なかった」¹⁸⁾。

ガーリブのこのカルカッタ行きは、ガーリブにペルシア語で詩作させる切っ掛けを与えた。ガーリブは1845年、『ペルシア語詩集』を出す但其の選は35年に終わっており、対句数が6672あった。ウルドゥー語では1841年に『ガーリブ詩集』を出す其、その対句数は1096で、その7、8年間にペルシア語の詩にどの位力を入れていたか容易に推測がつく。(3)に対しては、1850年ムガル朝史編さんの役を受け、さらにまた1854年皇帝^{ウスタード}の詩の師にあたるゾウクの死で、皇帝バハードゥル・シャー2世の詩作の師^{ウスタード}になり、宮廷に出入りすることになったことによる。

(4)に対する理由は、はじめて『ガーリブ詩集』を1841年出す時、この選は1833年には終わって

いたが、難かしすぎるとの友人の忠告に従い、初期の所を大幅に落としていたことによる。そんな訳で初期の作品では、ガザルの特徴を作る最初の対句（マトラー）や詩人のペンネームが入ってくる最後の対句（マトラー）などがないものが少なくない。

いずれにしても、現在でも人々に影響を与え、また『ヴェーダ』と共にインド亜大陸で二大啓示書の一つとされている『ガーリブ詩集』の中のガザルが、20代までに書かれてしまっていることは注目に価することである。

注

- 1) “Diwān-e-Ghālib” Ghālib Institute, Delhi, 1986, p.
- 2) “Diwān-e-Ghālib” Ferozsons Limited, Lahor, 1992.
- 3) “Nuskah-e-'Ursī Diwān-e-Ghālib” Anjuman-e-Taraqqī-e-Urdu (Hind), Aligar, 1958, pp.75~78.
- 4) 前掲書 pp.78~81.
- 5) 前掲書 pp.81~82.
- 6) 前掲書 pp.82~84.
- 7) 前掲書 pp.84~87.
- 8) 前掲書 pp.88~90.
- 9) 前掲書 pp.92~96.
- 10) 前掲書 pp.96~98.
- 11) 前掲書 pp.98~105.
- 12) 前掲書 pp.105~108.
- 13) 前掲書 pp.108~109.
- 14) 前掲書 pp.109~114.
- 15) Kalī Dās Guptā Rizā, “Diwān-e-Ghālib Kāmil Tārīkhī Tartīb Ke Sāth” Anjuman-e-Tarraqqī Urdu Pākistān, Karāchī, 1990
- 16) 前掲書 p.23.
- 17) Mālik Rām, “Zikr-e-Ghālib” Maktabah-e-Shi'r-o-Adab, Lāhōr, 1975, p.40.
- 18) 前掲書 p.150.

(2004年 9 月 25 日 受理)